

授業科目名	動物薬理学Ⅰ	科目コード	261028		
開講クラス	動物看護師学科	コース	動物看護師コース	学 年	2年
担当教員	堀脇浩二（非常勤講師）				
	実務経験教員（ <input checked="" type="checkbox"/> 有・無 <input type="checkbox"/> ） 実務経験内容 獣医師免許 ひかり動物病院院長 現場での症例を事例として授業に取り入れている				
開講時期	前期・後期・ <input checked="" type="checkbox"/> 通年・特別講義・その他		授業コマ数	30時間	
	<input checked="" type="checkbox"/> 必須・選択・選択必須		単位数	1単位	
使用テキスト1	書名	愛玩動物看護師の教科書 第3巻			
	著者	編：緑書房編集部			
	出版社	株式会社緑書房			
使用テキスト2	書名				
	著者				
	出版社				
参考図書					
授業形態	<input checked="" type="checkbox"/> 講義・演習・実習・実験・その他（ <input type="checkbox"/> ）				
<p>&lt;授業の目的・目標&gt; 動物看護師の業務には調剤の補助と投薬があるが、どちらも薬物に関する知識が不可欠である。この科目では薬物の基本的な知識を習得し、治療に使用する薬が体に有害な作用を表す毒物にならないようにすることを目標とする。</p>					
<p>&lt;授業の概要・授業方針&gt; 薬についての総論では、薬理作用、薬用量、取り扱う際の注意などを学習し、各論では動物病院で使用される主な薬剤の薬理作用、副作用、取り扱い上の注意点について、器官ごとに進めていく。</p>					
<p>&lt;成績基準・評価基準&gt; 前期と後期に優・良・可・不可の成績基準を設定する。評価の基準は筆記試験によるものとし、本科目の出席率が80%以上なければ本試験が受験できない。本試験における点数が80～100点を優、70～79点を良、60～69点を可とし、60点未満は追試とする。また、出席率が80%未満の場合も追試となり、追試においては60～100点を可とする。追試にて60点未満の場合は不可となる。 通年の評価は、前期と後期の本試験の点数の平均を算出し、その平均点が80～100点を優、70～79点を良、60～69点を可とする。</p>					
<p>&lt;使用問題集・注意事項&gt;</p>					
<p>&lt;授業時間外に必要な学修内容、関連科目、他&gt; 動物形態機能学Ⅰ、Ⅱ、動物臨床看護学各論Ⅰ、Ⅱ</p>					

授業科目名		動物薬理学 I
回	授 業 内 容	備 考
1	科目概要、学習目標 第1章 動物薬理学の基礎 1 獣医臨床における薬物治療の概念と目的 (p 90)	
2	第1章 動物薬理学の基礎 2 薬理学とは (p 90)	
3	第1章 動物薬理学の基礎 3 医薬品に関する情報 (p 91) 4 薬理作用と発現機構 (p 92)	
4	第1章 動物薬理学の基礎 5 薬物動態 (p 92)	
5	第1章 動物薬理学の基礎 6 薬物の効果に影響を与える因子 (p 98)	
6	第2章 愛玩動物看護師による薬物の取り扱い 1 投薬量計算 (p 101)	
7	↓	
8	第2章 愛玩動物看護師による薬物の取り扱い 2 薬物の剤形 (p 103)	
9	第2章 愛玩動物看護師による薬物の取り扱い 3 投薬方法とその特徴 (p 105)	
10	第2章 愛玩動物看護師による薬物の取り扱い 4 薬物の取り扱い (p 110)	
11	第3章 調剤法の基本 1 はじめに (p 112) 2 処方せんについて (p 112) 3 処方せんの読み方 (p 113)	
12	第3章 調剤法の基本 4 調剤の実際 (p 115)	
13	第3章 調剤法の基本 5 調剤するうえでの注意事項 (p 120) 6 失敗しないために (p 120)	
14	第2章 愛玩動物看護師による薬物の取り扱い コンプライアンスとアドヒアランス (p 103)	
15	前期復習	
16	フィラリアの生活環	
17	↓	
18	フィラリア症予防薬・治療薬	
19	犬・猫の主な外部寄生虫駆虫薬	
20	犬・猫の主な内部(消化管)寄生虫駆虫薬	
21	第4章 神経系に作用する薬物 1 自律神経作用薬 (p 122)	
22	第4章 神経系に作用する薬物 2 全身麻酔薬,局所麻酔薬 (p 127)	
23	第4章 神経系に作用する薬物 3 鎮痛薬 (p 130)	

	4 筋弛緩薬 (p 132)	
24	第4章 神経系に作用する薬物 5 鎮静薬,抗てんかん薬 (抗けいれん薬) (p 134) 6 問題行動の治療に用いられる薬物 (p 137)	
25	第5章 呼吸器系に作用する薬物 1 呼吸興奮薬 (p 139) 2 鎮咳薬 (p 140) 3 気管支拡張薬 (p 140)	
26	第6章 循環器系および泌尿器系に作用する薬物 1 心臓病における薬物治療 (p 141) 2 心不全の病態生理 (p 142)	
27	第6章 循環器系および泌尿器系に作用する薬物 3 心疾患治療薬の種類と特徴 (p 143)	
28	↓	
29	第7章 消化器系に作用する薬物 1 嘔吐に対して使用する薬 (p 148) 2 下痢に対して使用する薬 (p 152)	
30	第7章 消化器系に作用する薬物 3 便秘に対して使用する薬 (p 153) 4 肝疾患に使用する薬 (p 154) 5 膵酵素製剤 (p 156)	